



「たとえ運動会がなくなっても、給食がなくなっても、学校の存在意義は示せます。しかし、学校から日々の授業を取り去ってしまうと、それはもはや学校ではなくなるのです。」

ある先人がこのように語っています。

9日、子どもたちの登校後、警報が発表されました。それでも授業の歩みを止めることなく、3本の研究授業を行いました。そこで見られた、意欲的に学ぶ子どもたちの姿を紹介します。

未来に向かって歩む子どもたち

■第2学年 学級活動「もっと楽しい2-2にするための かかりをきめよう」

先日、ブログで紹介した学級会（力を合わせてえがお会議）の第2回目です。

2回目ともなると、子どもたちはやるべきことが分かり、さらに自分の工夫を加えようと思いました。

例えば司会の児童は、発言した友達を記録し、発表が特定の子に偏らないよう配慮していました。教師の指示によるものではなく、自分で考えて取り組んでいたそうです。

きっとこの後、第3回、第4回と進むにつれ、子どもたちはさらに、「自分たちの学級は自分たちでよくしていくんだ」という気持ちを高めていくのでしょう。その成長が楽しみです。



【第1回「力を合わせてえがお会議」の様子】

■第3学年 国語科「慣用句を使おう」

慣用句の意味や用例を調べる学習に取り組みました。印象的だったのは、調べる際に「自分の得意」を生かし、本で調べる子もいれば、タブレット端末で調べる子もいたことです。



タブレットを使う児童が大半だったので、少数派の、本で調べている子に声をかけてみました。

「どうして本で調べているの？」

「本のほうが、目次があって調べやすいから。」

2030 年度には、教科書が新しくなり、紙の教科書とデジタルの教科書が併用されるようになる可能性があります。この子どもたちなら、自分の学びやすい学習の仕方を選択し、柔軟に対応できそうです。

■つき1組 自立活動「気持ちと上手につき合おう」

私たち大人も、時にいらいらしたり、怒りを抑えきれなくなったりします。繊細な子どもたちならなおさらでしょう。この時間は、そのような感情とどう向き合っていけばよいのか考えました。

この授業の最後に、一人の子が「（みんなの発表を聞いて）不安や怒りがなさそうに見える子でも、怒ることがあるんだなあ。」と感想を述べました。

不安や怒りを抱くことは、決して悪いことではありません。誰でも抱くものです。大切なのは、その感情を認め、感情に振り回されずに生きていくことです。

右の図は、本校で活用している「ラーニング・マウンテン」です。学びの道のりを山登りに例えて表したものです。子どもたちは今、学びの頂上に向かって、一歩ずつ着実に歩みを進めています。

